●論壇

旅に学ぶもの

宮本　常一*

What You Get from Travel

Tsuneichi MIYAMOTO*

旅のたのしさは旅先で、それまで予想しなかったよい人に逢うことであり、思いそめぬものを見ることであり、また、新しいことを発見することである。汽車に乗って同じ線を何回通っても、そこに何らかの発見が毎回あるものである。同時に、旅をするたびに一つの課題を持って乗ってみることである。たとえば、民家の屋根がどんなに変わっていくだろうか、というようなことを一つの課題にして見ていくとする。

昭和20年までは、東京を出て熱海に到るまではトタン葺の屋根が多く、屋根は寄棟が多かった。遠州平野は昭和30年頃までは草葺の入母屋が多かったが、近頃は黒瓦に変わった。中には草葺の上にトタンをかぶせたのも見かける。それが愛知県へ入ると切妻の瓦屋根が多くなり、名古屋をすぎると、また入母屋になる。そして、入母屋はずっと下関まで続くのだが、広島県の三原から広島までの間は赤瓦が多くなる。

見た眼にはそれだけの現象だが、それについてまたいろいろ教えられる。神奈川県下にトタン葺が多いのは、関東大震災のとき瓦屋根の家は多く倒壊したが、草葺の家はほとんどつぶれなかった。つぶれなかった草葺はそのまま住んだが、つぶれた家はトタン葺に変わったという。災害は忘れた頃にやってくるという。近頃ひ弱な感じのする新興住宅がずいぶんふえて来たのだが、もし、大きな地震がおこったらどういうことになるだろうかと、新しい家を見ていてすごく不安になるのである。

寄棟の家は草葺の頃にも多かった。ところが明治に入って、いたるところで蚕を飼うようになった。蚕を飼うと上蔟のときには広い場所を必要とするので、座敷ばかりでなく天井裏を利用するようになった。しかし、天井裏は暗いので両側の屋根を半分ほど切り落して、そこから光をとることにした。このような屋根をカブトといった。最近は蚕をあまり飼わなくなったから、家を改造するときカブトにしなくなった。そして、初めから2階にするようになった。

入母屋の家が多いのは、草葺で煙突をつけることができなかった頃、家の中にこもった煙を破風から出すことができるので、破風のある入母屋が喜ばれたようである。そして、屋根が瓦葺になって煙突をつけても破風のある屋根は作った。

愛知県三河のあたりに切妻の家が多いのは、もとその奥のあたりに切妻の家が多かったことによるという。飛騨から木曽へかけては、昔は板葺の家が多かった。板葺の家は切妻が多かった。そして、この地方の大工は切妻の家を作ることを得意にした。山間の人々は草屋根よりも板葺屋根の方を佳としたので板屋根がひろがってゆき、板屋根が瓦葺になっても切妻にしたものだという。また、そういう屋根の家を作るのは飛騨や木曽の大工が多かった。

このような話は無限にひろがっていく。注意して見ており、それを何かの機会にその地方を歩いたとき土地の人にきいてみる。これは屋根ばかりでなく、あらゆるものについてためしてみることができる。物には変わっていくものも多いが、根本においては変わらないものも多い。何が変わり、何が変わらないのか、何が消え何が残るか、10年も20年もためしているといろいろのことを教えられる。だから旅は楽しく、また旅によって実に多くのことを教えられる。

* 武蔵野美術大学名誉教授
Professor Emeritus, Musashino Art University
原稿受理　昭和54年9月12日